

# ともだちでいびと

*mon ami sucré*

川の深い淵の底で横たわって、にとりほぼうつと空を眺めていた。  
一人で暇な時、考え事をしたい時、食後の休憩など、よくその場所を使う。ひんやりと涼しくて、うるさい音がしなくて、誰にも話しかけられない。家は地上にあるけれど、自分の部屋以上に快適な場所だった。

深く掘り下げられた水底から見える太陽はちらちらと煌めき、ぼやけていて、とても綺麗だ。こぼこぼと上がっていく泡やくすぐったい水の流れや、時々通り過ぎていく魚のひれの揺らめきと相まって、穏やかで静かな動きがあって飽きない。

この光を眺めていると、あの黒白の魔法使いのことを思い出す。  
ひどく明るくて綺麗なのに、その輪郭はどこかぼやけていて、優しい。捉えようとして指を伸ばしてもそれは遠くにあつて、届かない。

空へ向けて手を伸ばす。本当に、彼女は水面の膜一枚隔てた向こう側にある太陽のようだ。この手は決して届かないのに、自分のものにしたくなる。

——欲しいなあ。

水の中で、言葉は声にならない。こぼこぼと泡になって上がっていくだけ。

——あれ、すごい欲しいなあ。キレイだもんなあ。きらつきらだもんなあ。

独り言は続く。

カラスほどではないにせよ、河童だって光り物は好きだ。特に女の子なら誰だってそうだろう。宝石でもガラス玉でもビーズ細工でも、光を浴びて輝くものはみんな好きだ。

それを自分一人で抱きしめて独占したいと思うのは当然のことだ。

太陽の光を丁寧によって糸にしたような金色の髪がきらきらと輝くイメージ。盟友という言葉を超えて、途方もない魅力を放つその人間のことを、にとりは心の底から欲しいと思う。

——ダメだろうなあ、きつと届かないだろうなあ。  
 そう考えると少しシユンとする。自分には値が高すぎる。果てしなく遠い場所にあるそれを取りに行こうと思っただらきつと、月に向かうロケットよりすごい力が必要に違いない。それだけの力が自分にあると思えなかった。何しろ、ちよつと油断していたとはいえ、人間の巫女や魔法使いに負けてしまうくらいだ。

と、光が大きく陰る。黒い何かが水の上を流されていく。

——あ。

慌てて起きあがった。ひとときわ強く、泡が立つ。強く川底を蹴った。流れていくそれに一瞬で追いつく。水面に顔を出して、その名前を叫ぶ。

「魔理沙っ！」

一目見ただけで黒いそれが人間だと気がついたのは、僥倖と言っていいくらいだ。ズタボロに切り裂かれたエプロンドレスが痛々しい。裂け目から覗く白い肌から、にとりは目をそらした。

岸まで引つ張って泳ぐ。まったく意識がないようだ。呼びかけにも返答しない。

平らな所まで抱きかかえて運んだ。にとりだつてけて大柄な方ではないけれど、小さなその子はひどく軽くて、思わずうろたえるほどだった。

砂利の上に着を敷いて寝かせて、呼吸を調べる。無い。一瞬だけ躊躇うが、仕方のないことだと自分に言い聞かせる。

そのつめた唇に自ら口づけて息を吹き込む。その感触を味わっているほどの余裕はない。ただ頭の中で数をかぞえる。それくらいしか出来ない。心臓が高鳴って、頭の中がパニックを起こしている。

彼女の胸に手を添えて、強くマッサージする。一、二、三、四、五……。そしてまた人工呼吸。自分にひたすら落ち着けと繰り返し呼びかける。

「げほっ」

やがて、口から水を吐き出して、魔理沙は息を吹き返した。にとりは小さく息をついて、額の冷や汗をぬぐった。

「ここ、どこだ」

朦朧とした様子で、魔理沙は起きあがろうとする。それを押しとどめる。

「いいから、ちよつと休んでな」

横向きに寝かせると、素直にそのまま従った。

「落ち着いたら、うちに来なよ。そのままじゃ寒いでしょう」

「悪い」

それだけ言って、魔理沙は黙った。少しだけまた咳き込む。その様子はひどく弱々しくて、ぎゅつと抱きしめてあげたくなった。

どうどうと流れる川の轟きの傍らで、二人だけが静かにしていた。にとりはいろいろなことを聞いたいのを堪えてただ一言だけ、どうしたの、とだけ聞いた。

「……喧嘩した」

魔理沙はそう答える。

「誰と」

「友達と」

「そっか」

それ以上のことは聞かないことにした。魔理沙の声は今にも泣きそうで、言葉をこれ以上長く紡げば、音にならずに涙になって消えていってしまうそうだった。

「じゃあ、そろそろ行こっか」

にとりはそう言うと、魔理沙の膝下と背中に手を差し入れた。そっと抱き上げる。

「ちよっ、な、何するんだよ……」

「しよぼくれている魔理沙が、あわてて騒ぐ。」

「暴れるとあぶないよ？」

「そんな当たり前みたいな顔してゆーなっ！ 私よりちびのくせにっ」

「河童は相撲が得意だからだいたいじよーぶ。ちびっこでも体力には自信あるのさあ」

トドメをさすみたいに、にへら、と笑った。魔理沙は顔を赤くして、それから、ぎゅっにとりの首にしがみついた。腕も足も冷え切っているのに、その身体の内側から出てくる吐息を不思議なほど熱く感じた。

家までの数分をわざとゆっくり歩いた。そのままふわふわ飛び上がっていきそうな気分だった。背中のリュックと腕の中の魔理沙と、どっちもそれなりの重さはあったのに、息一つ切れなかった。まあ、変なドキドキはあったし、思いつきり息を吸い込みたくなるくらい良い匂いがしてたけど。

やがてにとりの小さな家についた。近くに作った地下研究所にほとんどのモノは置いてあるから、ほとんど寝るだけの場所ではあるけれど、小さな風呂も台所もある。

「おろすよ」

「ん……」

ちよっと残念そうな顔をしていたように見えた。多分気のせい。そうだったらいいなってだけ。

「お風呂入れるからちよっと待ってて」

にとりがそう言うと、魔理沙は小さくうなずいた。玄関の上がりかまちに腰掛けて、ぼうつと靴のつま先を眺めていた。その背中はひどく小さくて、たとえ一瞬でも一人で置いておくのも憚られた。

河童特製の瞬間湯沸かし器のスイッチを入れて、お湯を湯船に注ぐ。

玄関に向けてちよっ顔を出して、言った。

「ね、一緒にはいるーか」

「なっ……!!」

「ぼつと振り向いて、魔理沙はにとりを見る。目をまん丸くして、ひどく可愛かった。」

「私も濡れた魔理沙に触ってぐしょぐしょだし」

「変な言い方すんなー！」

「ん、変かな？」

にとりは鈍感である。何故魔理沙が顔を赤くしているのかよく分からないし、何が変なのかもよく分からない。

「はいはい靴脱いでー。脱衣所こっちー」

「う、ん……」

袖を引っ張られて、よろめき歩く。何か反論しようとして、止めた。弱っていて、押しに負けている感じがした。

「さーて、脱がすぞう」

「ばん、と手を打って、魔理沙を促す。濡れたエプロンドレスの紐は、かたく結ばれていて解きにくかった。」

「い、いい。自分でやる」

「あ、そ」

手を振り払われる。仕方なく自分が脱ぐのに集中する。

素肌を見せ合うことに、ためらいがないと言えは嘘になる。けれど服の構造上、脱ぐ速度というものは圧倒的に違う。細々した紐やフリルのついた魔理沙のエプロンドレスに比べて、濡れてもすぐ乾く河

童のワンピースは圧倒的に脱ぎやすい。  
 たちまちのうちに、にとりは一糸まとわぬ姿になる。首だけ傾けて、魔理沙を見る。  
 「まだー？」  
 「……もうちよっと」  
 小声で答えた。背筋を丸めて、まだもぞもぞと服の中で埋もれている。  
 「やっぱ手伝うよ」  
 「い、いいってば」  
 「ほらほら」  
 抱きつくようにして後ろへ指を滑らせる。背中のボタンを一つずつ丁寧に外していく。柔らかな頬と頬が擦れ合う。  
 「冷えちゃってるねえ。早くあったまろ」  
 「う、ん」  
 魔理沙は大人しく脱がされるままになっている。ばさりと濡れた服が落ちた。そのままお手製洗濯機へ放り込む。  
 おずおすと風呂場へ向かう魔理沙の白い背中をすうっと人差し指でなぞった。  
 「ひゃうっ！」  
 「お、人間が鳴いた」  
 びくんと飛び上がった魔理沙をにやにやして見る。  
 「や、やめろよおっ」  
 「姿勢悪いとおっぱいちっちゃくなるよ？」  
 「う、うるさいやい」

そう言って、振り返った魔理沙はじつにとりの胸元を見た。  
 「えへん、どうだ」  
 むん、にとりは胸を張る。自分でこういうのもなんだが、けっこうある、と思う。少なくともかうじてふくらみだと分かるような大きさの魔理沙のそれよりは、明らかにたっぷりとした質感で、動くたぶんと揺れる。その分、肩が凝るぐらいの重みがある。  
 「食った栄養全部、ここに行ってるんじゃないか」  
 ようやく魔理沙の口から憎まれ口が出た。それだけですごく安心する。  
 「残念。あいにく私は頭も良いからね」  
 「じゃあ食い過ぎだな。年取ってから太るぞ」  
 「あー、私の手料理食ってからそれ言いな。食い過ぎで苦しんでも知らないからね」  
 そう言って、べったんこの魔理沙のお腹をべちんと叩いた。  
 「えへへ、もっと太らせちゃる、こんにやろ」  
 そのままきゅっと抱きしめた。ほおずりする。すべすべの肌が心地よい。  
 「なっ……にとり？」  
 「えへへ、魔理沙と一緒に風呂、嬉しい」  
 ちゅっつと小さくほっぺたにキスをする。  
 「……なんだよ」  
 魔理沙はちよっと仏頂面で、でもそれが照れているだけだっつてすぐ分かる。二人で手をつないで、洗  
 い場まで進む。魔理沙を先に座らせて、ゆっくりお湯を掛けた。  
 「どう、熱くない？」  
 「ん、大丈夫」

手のひらで石けんを泡立てる。魔理沙の背中に手のひらを滑らせる。ふんわりした泡の下、びんと張った肌のつやが眩しくらいに綺麗だった。

つるりと背中を撫でて、それからちよつと深呼吸して、その下の腰まで手を伸ばす。

「んひゃうっ」

「あ、くすぐったかった？」

もちろんわざとである。

「ん、う……自分でやる」

「いいからじつとしてて」

振り向こうとする魔理沙を身体全体で抑える。ふに、と大きな乳房を背中に当てるだけで、魔理沙の動きが止まる。

その隙に手を前にまわして、柔らかな太ももを撫でる。微かに赤く染まっている。石けんを滑るからか、魔理沙もにとりの手をちゃんと防げない。

「……恥ずかしい」

とろけそうな声で魔理沙が言った。にとりはその手を止めない。

「いいじゃん、気にしない気にしない」

慎ましい大ききの乳房にも軽く触れた。ぴくんと身体を震わせる魔理沙が可愛くて、それ以上暴走しそうななるのを一生懸命我慢した。

「はい腰あげてー、おしり洗うよー」

「やっ、そこは、だめ！」

「うるさいねえ。黙って大人しくしてなよ」

今日は一日、なんだか可哀想なこの子を大切にしているって決めたのだ。いつ決めたのかと言うと、

今決めた。

ぎゅつとウエストを片手でしぼるようになって、そのまま抱き上げる。右手を腿の裏側からひゅつと後ろ側に滑らせる。柔らかくて、なんだか弾力があつたから何度もなで回したくなつたけれど、それはやっぱりあまりにも変態すぎると思ったので、三回往復したところでやめた。

たつたそれだけで、魔理沙はなんだかぐつたりと大人しくなつてしまった。

「ううう、およめにいけない」

「私がもうから大丈夫」

「馬鹿言え」

ふつと顔を膨らまして魔理沙は答える。

「さ、湯船はいるよ」

自分は自分でぎゅつくり洗って、湯船にたふんとつかる。

はじつこで膝を抱えている魔理沙を引き寄せて、自分の腕の中に抱える。

さつきまで冷え切つて紙のように白かつた肌が、今は暖かさにかすかに朱がさして、咲き初めの桜のように色づいていた。

魔理沙の無防備な首筋に軽く口づけた。

「な、なんだよ」

「ん、美味しそうだった。桜餅みたいで」

「変なことすんのやめろ」

「えへへと笑つてごまかす。頭がお湯でふやけてふにゃふにゃになりそうだった。」

「もう、そういうの、しないって決めたんだ」

魔理沙の声が少し沈む。嫌な予感がした。  
戯けるようににとりは言った。

「しないの？」

「ん、しない」

魔理沙の声が、少しだけ震えていて、にとりはそれ以上追求するのを諦めた。今日、流されていたのと関係があるのかもしれない。

「あ、そうそう。お腹空いたでしょ、人間」

「え、あ、うん」

「魚好き？」

「うん」

「良かった。鮎の甘露煮とご飯あるから、良かったら食べて」  
そう言って、風呂から出る。

「ま、待てよ」

「ああ、魔理沙は入っていいよ。私、のぼせやすいからさ」

「そ、っか」

「あ、それともさみしい？ さみしかったら側にいるけど」

「いっ！ いなくていいっ！」

ふるふるとう首を横に振る魔理沙が無性に可愛く見えた。

さつぱりとした気分で、二人で食卓を挟んで向かい合う。おそろいの服を着て、同じご飯を食べているとなんだか家族になったみたいなきもちがした。今日の自分が舞い上がっていることを自覚する。

「にとり、ホントに料理美味いな」  
魔理沙が微笑む。いつものような快活さは無いものの、今日初めての笑顔が見られてにとりは満足だった。

「もうちょっと時間あったら、もっといっぱい作るんだけどさ。とりあえずお腹空いたし、お昼ご飯ならこれぐらいでちょうどいいでしょ」

「うん。味付けもちょうど良いし」

「良かった良かった。おかわりたくさんあるからね」

魔理沙は、そのイメージに似合わず小食だった。小さな茶碗にごく軽く二杯食べただけで箸を置いた。もともともたまたま今日がそうだけなのかもしれない。まだ何か、ズタボロになって川を流れてしまいうぐらいの大喧嘩のことが尾を引いているのだろうか。

「何か、心配事でもあるの？」

やはり気になってしまう。下手な地雷を踏むより前に、単刀直入に聞いてしまうことにした。

「ん……にとりにこんなこと言ってもいいのかわかんないけど、聞いてくれるか？」

微かにうつむき加減で、魔理沙は言う。にとりはこくりとうなずいた。

そのまましばらく間が空く。落ち着かなくて、にとりは座布団の上で何度か座り直した。

微かな風が二人の間を通り抜けていった。音もしない空気の流れが、そのまま時の流れになって、過ぎていった。

やがて、魔理沙が意を決したように、顔を上げた。その目はひどく真剣だった。

「あんな、友達に……ていうか、好きな子にちゅーしてみたんだ」

「そ、か」

——魔理沙は好きな子がいるのかあ……。